第187回 長崎大学ＦＤ実施報告書（平成31年3月28日提出）

１．題　目：FD 講習会：「アクティブラーニングをどう捉えるか」

２．日　時：平成 31 年 3 月 19 日（火）15：00～17：00

３．場　所：教養教育棟 1 階 A-12 教室

４．主　催： 教務委員会　企画・実施： 評価・FD 教育改善専門部会

５．対　象：全教職員（学外・非常勤を含む）

６．長崎大学ＦＤに関する申合せ第２第１項への該当について【複数選択可】
（該当するものに○を記入すること）
[　　]（1）　教員の教育活動に関するもの
[　　]（2）　カリキュラムの改善に関するもの
[　○　]（3）　教育の組織的改善に関するもの
[　　]（4）　入学者選抜方法の改善に関するもの
[　○　]（5）　その他教育改善及び入学者選抜の改善に関するもの

７．今回のＦＤの趣旨・意義（６．に関連した形で記述すること）
本学では「学生の思考を活性化させるための授業手法」として
「A 授業内容の理解度を確認したり自分で考えさせたりする活動」
「B 多角的に考えるために他者と関わる活動」
「C 技能修得のために実践する活動」
「D 問題解決のために知識を総合的に活用する活動」
「E 上記以外の学生の思考の活性化を促す授業手法」
の５つに分類してシラバスに記載しています。その授業手法の分布を見ると学部ごとに傾向があることがわかりました。本 FD では，そうしたアクティブラーニングの取り入れ状況を踏まえ，より効果的なアクティブラーニングを普及するために，改めてアクティブラーニングとは何かについて考えたいと思います。グループワークにとどまらないアクティブラーニングの取り入れ方や，教員の多様な授業観にフィットするアクティブラーニングの可能性について検討します。

８．プログラム構成［題目・担当講師］（当日使用した資料等を添付すること）

14:45～15:00　受付（A-12 教室）

15:00～15:05　開会の挨拶（大学教育イノベーションセンター）

15:05～15:25　「長崎大学でのアクティブラーニングの現状」
講師：成瀬 尚志准教授（大学教育イノベーションセンター）

15:25～16:35　「アクティブラーニングをどう捉えるか」
講師：石井 英真准教授（京都大学教育学研究科）

16:35～16:55　質疑応答

16:55～17:00　閉会の挨拶（大学教育イノベーションセンター）

９．参加者：37 名

（内訳）

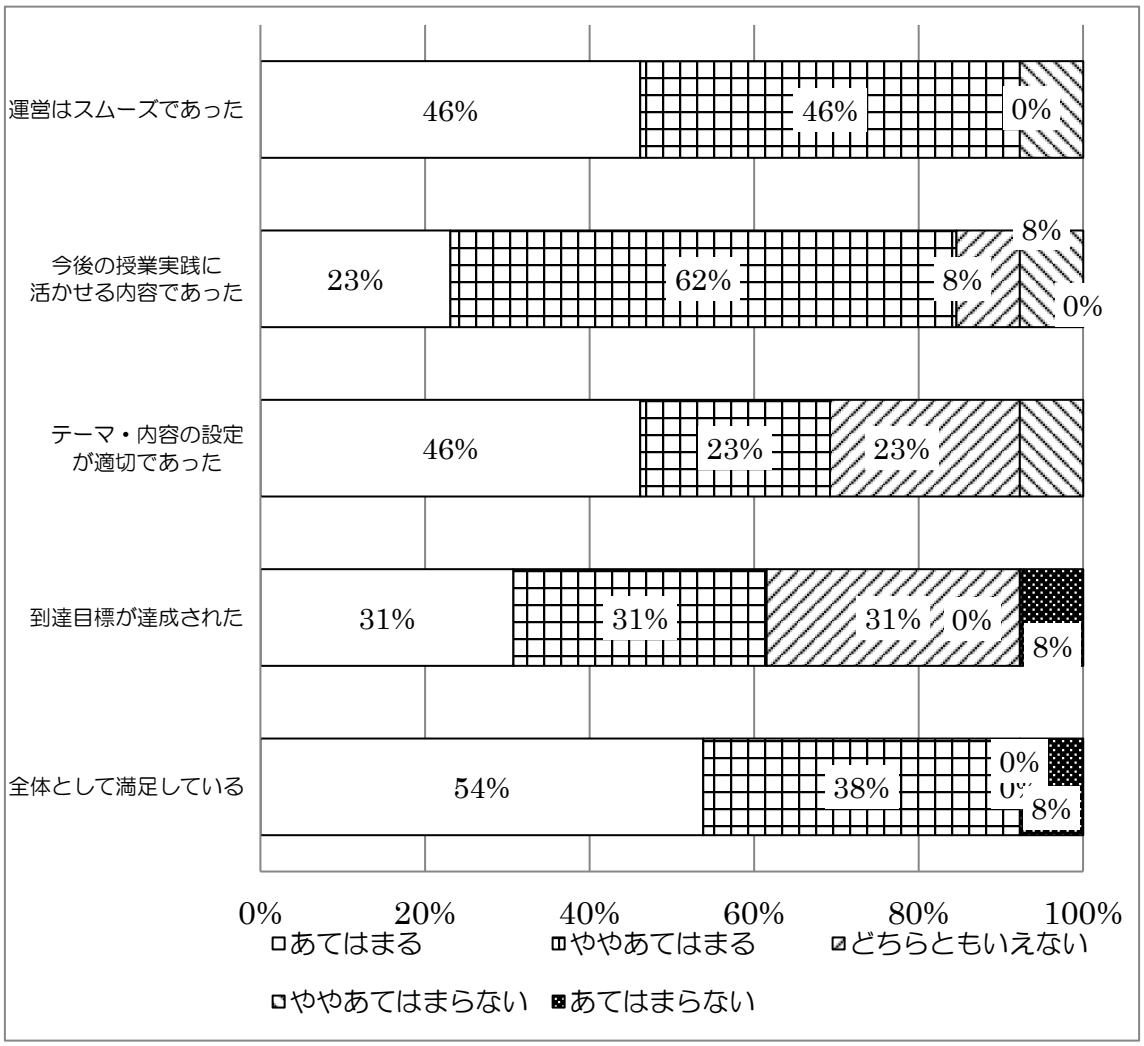
所　属	人数
教育学部・教育学研究科	5
多文化社会学部	1
工学部・工学研究科	4
経済学部	2
水産・環境科学総合研究科（環境科学領域）	2
水産・環境科学総合研究科（水産科学領域）	1
医歯薬学総合研究科（医学系）	4
医歯薬学総合研究科（歯学系）	3
先導生命研究支援センター	2
ICT 基盤センター	1
グローバル連携機構	1
言語教育研究センター	1
地域教育総合支援センター	1
熱帯医学研究所	2
熱帯医学・グローバルヘルス研究科	1
留学生教育・支援センター	1
原爆後障害医療研究所	1
研究開発推進機構	1

グローバル連携機構	1
大学教育イノベーションセンター	2
計	37

※　別紙に参加者名簿を添付してください。

１０．実施したＦＤの成果等

（１） 参加者からの評価（アンケートの集計結果を記述する）



Ⅱ．今回のプログラムについて、お気づきの点・ご意見・ご感想をご記入下さい。

・教える側が学ぶ側と同じところでやって行くことが大事だと思いました。
　そのためにアクティブラーニングを生かして行けたらと思います。〃

・もう少し具体的な話しも聴ければよかったと思います。

・特になし
・スライドがビジーで、一部、内容が難しかった。
・パワポ資料の文字が多すぎる。口頭説明と資料の内容が一致していなかったり、どの部分を説明しているのかわからないことがしばしばあった。
・大学における授業のあり方を見直す機会になりました。どのような課題、発問を投げかけていけばよいのか大変参考になる講義でした。有難うございました。
・専門的な用語や説明の内容が漠然としていて、理解できない部分も多かった。もっと学部や専門性を踏まえた内容にした方が問題意識を把握できると思う
・アクティブラーニングというよりも正しい講義の進め方に発見があった．①になりがちなので②を心がけるだけでも，講義内容が変わるのではないかと思った．理系の学部では企業が要求している最低限の基礎知識を身につけさせる義務があるため，１つの講義ではなくカリキュラムとして総合的にアクティブラーニングを取り入れる必要があると思っている．
後半は、初等中等教育を実例に挙げて説明されていたのですが、特に高等教育、なかでも工学部の学部授業は知識を詰め込む必要があるタイプの授業があると思います。講義と演習で構成される授業のほうが、やる気のある学生は伸びると思います。研究室に配属後のゼミは教師と学生が対等で研究の心理をお互いに考えるタイプでも良いと思うのですが。ちょっと、もう少し、自分の置かれている状況（高等教育、工学部）に近い話を聞けると良かったと思います。
・理系学部と文系学部のアクティブラーニング傾向の違いが面白かった．自分は理系なので理系学部の傾向に共感できた．講義，計算演習，実験観察という昔からのスタイルが反映されている結果だと思う．
・石井先生の教師の立ち位置の図（スライドの最後の②の図）がとても分かり易かった．自分の経験からも腑に落ちるとことがあった．
・京都大学は学修機関であるが，長崎大学は教育機関であることを痛感させられた．″
私は教育が専門でない（教職課程を取っていない）せいか、授業目的などが具体化しないことがあるのですが、タキソノミーなどで分類してもらえばわかったような気がします。でも、「わかる」を「使える」にしないといけないんですよね。それはまだ無理かもしれません。

Ⅲ．長崎大学 FD としてとりあげるテーマ・内容についてご意見・ご要望をご記入下さい。

・ジェンダー問題
・特になし
・ＦＤでよく「大人数のクラス」というキーワードが出るので、それをテーマにするのはどうでしょうか。

・講義の改善の仕方などの具体例が聞きたい.
・コーチングと教育
・興味喚起や動機づけの方法.

（２） 総　括

本 FD は、長崎大学でのアクティブラーニングの現状を踏まえ、アクティブラーニングを全学的に浸透させるためにはアクティブラーニングの適切な理解が必要であるということから開催された。

まず、成瀬准教授から「長崎大学でのアクティブラーニングの現状」というタイトルで報告がなされた。その中で、本学ではアクティブラーニングを「授業を活性化させるための授業手法」とし、本年度からシラバスに記載しているが、その授業手法の分布を見ると学部ごとに傾向があることが確認された。また、その分布の違いは、学問分野にともなう授業観、教育観の違いを反映しているのではないかと指摘された。

次に京都大学の石井英真准教授から「アクティブラーニングをどう捉えるか」というタイトルで報告がなされた。学生が主体的に学ぶかどうかは、＜知識（あるいは正解）を教員がもっており、その知識を学生に伝える＞タイプの授業ではなく、＜授業で扱う知識について教員と学生がともに検討し合う＞タイプの授業であることが指摘された。表面上アクティブな活動が取り入れられていても前者のような授業設計の場合は学生の主体的学びは生まれず、また、表面的は前者のような講義型の授業でも、学生の主体的な学びが生じている授業は後者のような構造になっているということであった。

質疑応答も活発に行なわれ、後者のタイプの授業にするための具体的な工夫についても様々な角度から議論がなされた。また、全体的な満足度も非常に高いことから当初の目的を十分達成した FD であった。

（文責：成瀬尚志）

１１．実施代表者の連絡先

教務委員会委員長 塚元 和弘
e-mail：ktsuka@nagasaki-u.ac.jp 電 話：内線 2003

１２．申請者の連絡先

学生支援部教育支援課教養教育班
主査 寺川 美穂
e-mail：fd@ml.nagasaki-u.ac.jp
電 話：内線 2077